

## 女相続人の条件



“An Heiress on Condition”

(1880)

ある青年画家が、イングラッド中部地方に典型的な田園の眺めを背景として、水平に広がった芝地の極めて美しい地点に自分の画架イーゼルを設置していた。そこでは、馬車の轍わだちの残った小道が異常なほど浅い小川に向かって傾斜しており、とても粗末な木の橋を渡った反対側では、また上り坂となっている。そして、反対側の左右の苔こけむした小高い土手はカシヤトネリコ<sup>(1)</sup>の丈夫な大枝の陰になっていて、大枝の一番先の背後からは田舎風の小さな家の切妻<sup>(2)</sup>の張出部分が顔をのぞかせていた。画家の頭上ではクリの木の大きな葉っぱがサラサラ音を立てており、ありがたいことに強い日差しを撃退して、かぐわしい大気の中で快適な涼しさを提供してくれている。画家の前にある油絵には数日ほど技巧を凝らした形跡が見られ、この絵にはその主題に値するものがすでに表現されていた——と言えば、かなりほめ過ぎであろうか。しかし、画家は不満そうに絵から顔をそむけ、「彼女は誰だろうか？」とつぶやいていた。というのも、ちやうどその時、木の橋を渡っている三人の姿が見えたからである。最初が中年の御婦人、次がずっと若い女性で、最後が背の高い、まあまあ上品な物腰で、着ている服だけは極上の品だと分かる若者であった。

「ぼくの前を通りすぎるのは、この三日間で二度目だな」と、青年画家は頭の中でまた思いをめぐらせた。「明らかに母と娘に見えるけど、一体全体、あのキザな野郎は誰なのか？ 母と娘の方は間違いなく淑女だし、付き添いの男も紳士の部類に入れないわけにはいかない。だけど、あいつは鼻もちならぬアンポンタンだろう、きつと——彼女の兄さんかな？——まさ

か！　ほんの少しも似てないじゃないか。じゃあ、あんな仕立屋の動くマネキン野郎が、何の権利があつて彼女の横にいるんだ？　彼女はシンプルな白のドレスと麦わら帽子の装いで全身が優雅そのものだ。それに対し、あいつの方はいやな模様のコート、シルクの山高帽、派手なネクタイ、これ見よがしの宝飾品と必要もない片メガネだ！　あの野郎が将来の夫なんかだったら、オレは堪忍袋の緒が切れて発狂しちゃうぜ、まったく——しかし、まあ、そんなことはどうでもいいや。ちよつと寂しいなと思つてただけ——それだけのことさ。彼女たちを追いかけて、お近づきになつてくたさいつて言うのも不作法だしな・・・」

彼は一時間ほど絵を描き続けた。それから、サンドイッチを食べて元氣を出そうと、小さな箱を開けた丁度その時、先ほど自分が手厳しく批判した若者がやつて来るのに気づいて少し驚いた。この伊達男はひとりであらうと近づいてきたが、金の取っ手がついた杖を時おり使つて、うつろな表情で小石や枯れた枝木やイラクサをつついていた。橋のあたりに来ると立ち止り、木の手すりに寄りかかったが、ぼろぼろになつた手すりにコケやカビがついているのを急に思い出し、ハツとして体を起こしてから、取り出したハンカチでコートのそでを慎重に拭いていた。それから、また前に進みながら、時たま立ち止つては片メガネ越しにミヤマガラスやモリバトを見つめていたが、青年画家のことが氣になるのだろうか、横目でチラリと見ながら近づいてきた。画家のそばを通りすぎようとした丁度その時、彼は急に右折して油絵をのせた画架の近くに來た。

「おはよう！」と、彼は気取ってはいるものの不快とは言えない大きな声で叫んだ。そう挨拶しながら、ポケットから葉巻入れを取り出し、開いてから画家に差し出した。画家は少し驚いたが、にべもなく固辞もできないので、ちゃんと感謝の言葉を述べて一本いただいた。伊達男はマッチ箱を手渡したあと、今度は自分のために火をつけた。

「絵の制作にはかなり暑くないかな？」と続けて言いながら、彼は頭を片方にかしげて絵を見つめ、勢いよく葉巻をふかふかと吹かした。

「そうですね。でも、陰になる場所を選んでますから」

「たしかに！ いい思いつきだよ。で、そんなに長く絵筆を持つてると、腕の筋肉が疲れやしないかね？ 実際、このところメチャクチャ暑いから、髪をブラシで解くのだって、全然やる気が出やしない」

「慣れるもんですよ」と画家は笑みを浮かべて答えた。相手の男の口調や物腰には馬鹿げたほど温厚なところがあつたので、すぐ追い払うのはあまりに乱暴に思えた。

「ああ、そうだろうね。でも、ぼくはロンドンにいるから、二日連続で田舎暮らしをするなんて、考えただけでも我慢できないよ。で——信じられるかい？——このあたりで一ヶ月ほど暮らすのは、これで二年目なんだぜ」

「ホントですか？ ぼくはほとんど苦になりませんがね。これ以上に楽しい場所なんて、イングランドにはそんなにありませんよ」

「へえ！　そう思ってるの？　まあ、十人十色だからね。ぼくはといえば、紳士クラブの集會室とか競馬場とかの方が好きだなあ」

「社交がお好きなんでしょうね？」

「おい、おい！　だって、ねえ、人間には変化が必要だぜ。で、多分、初対面の人間がこんなふうやって来て、ちよつかいを出すのははしたないって君は思ってるはずだけど、ぼくは——實際、午後はほとんどひとりぼっちなんで、どうやって過ごしたらいいか分からのだよ。たしかに旅館でスキットルズ<sup>(3)</sup>はできるけど、あんまり上品なゲームとは言えんからね。実を言うと、ぼくと旅館の主人は相手の言葉を理解するのに少し苦労してるんだ。このあたりの方言を君はかなりよく知ってるようだね」

「そうでもないですよ。間違はなく、ぼくにとつての方がずっと難しいはずですよ。だって、もともとアメリカ人で、イングランドに来てまだ一年ぐらいいしか経ってないんですから」

「へえ！　まさか！　驚いたね」と伊達男は大声で言ったが、それまで浮かぬ顔だったのに、今は異常なほど興味を覚えたようで、表情がパツと明るくなった。「じゃ、ニユーヨークのことは知ってるんだね」

「とてもよく知ってますよ」

「かなり大きな所でしょ？」

「まあまあですかね」

「へえ！」

しばらく彼は立ったまま画家を見ていたが、少しためらいながら続けて別の質問を投げかけた。

「ニューヨークでファーンズワスって名前の人と知り合いだったなんてことはないよね？」

画家はびっくり仰天して油絵から目をそらしたが、すぐさま驚きを隠して、この新しく知り合った男の顔をそれまで以上にじっと見つめた。

「そういう名の親友が一人いますよ」と彼は静かに答えた。

「まさか！ フィリップ・ファーンズワスとかいう人じゃないよね？」

「そういう名の知り合いは二人いましたよ」

「ホントに？ メチャクチャ奇妙なことだ！ ひょっとして、その二人はぼくの親類じゃないかって思ってるんだけど、父と息子だったかい？——へっ！ こんなにたくさん質問するなんて、無礼な奴だと思ってるだろうが、ぼくは——ぼくはメチャクチャ知りたいんだ——このファーンズワス親子のことをね」

「とんでもありません——そうです、たしかに父と息子でした。ぼくの記憶が正しければ、父のファーンズワス氏は約三年前に亡くなっています」

「でも、息子はまだ生きてるんだろ？」

「ええ。時には便りももらってますよ」

「へえ、そうなんだ！　ごめん、ごめん、奇妙な偶然だなんて言うつもりだったのさ。ファインズワース氏がイングラランド人だったかどうか、そのことは知ってるかい？」

「ええ、そうでした」

「へえ！　それじゃ、その人がぼくの叔父さんであることに疑いのうの字もないね。ぼくの名前はファインズワース——フレデリック・セシル・ファインズワースなんだから——もし犬や馬と同じぐらい絵画についても知ってたら、おそらく君の名前もよく知ってただろうね？」

「そんなことはないですよ。ぼくのが知られてるのは狭い交際範囲の中だけです。ぼくの名前はエドワード・ベントンです」

「どうも。このあたりに滞在してるのかい？」

「この道を一マイルほど先に行った『御者旅館』です」

「ぼくの方はあちらにあるミードム村の『馬車馬亭』だよ。少し唐突だけど、もし先約がなければ、ぼくの厚かましい願いを聞いてくれないかい？」

「喜んで」

「それじゃ、ちよつと夕食を一緒にしてくれたまえ。今日はひとりで食べなくちゃならず、それがいやなんだ。消化によくないしね。いつかロンドンのクラブで君に提供したいと思つてゐるような夕食は御馳走できないけど、おそらく野鳥の料理と——魚料理か何かと——牛を半頭ぐらい使つた肉料理と——間違いなく極上のチーズが食べられるよ。それから、スキットルス



という名のゲームが多少なりとも好きなら・・・」

「消化の助けになりますしね」と、画家が話に割り込んで愛想よく言った。「まあ、実のところ、ぼくの方がもっとひとりぼっちですから、遠慮なく招待を受けさせてもらいますよ」

絵の道具をさっさと詰め込んだ青年画家は、伊達男とともに小さな橋を渡ってミードム村の方へ歩いて行つた。この村には不規則に延びた一本の道しかなく、その遠い端に光栄にもファーンズワス氏から臨時の住まいとして選ばれた旅館があつた。二人が着席して食事をしたのは、立つても天井に頭がなんとか触れずにすむ小さな気持ちのよい特別室だったが、格子窓はそよ風を入れるために押し開けられていた。実際、そよ風が時々長い芝生の斜面をサーッと吹き抜け、セイヨウナツユキソウやスイカズラ<sup>(4)</sup>の馥郁<sup>ふいく</sup>たる香りが運ばれてきたり、窓辺のバラの葉が揺れて部屋の中に顔をのぞかせ、純白のテーブル・クロスに揺らめく影を投げかけることもあつた。食事の間ずっと、この接待役が自分にとって不快でしかない状況のもとで毎年一ヶ月も片田舎で過ごす理由とは何か、画家は心の中で必死になつて突き止めようとした。そして、ファーンズワス氏が料理をひと口食べるごとに打ち解けてきたので、その秘密は遅かれ早かれ明るみに出るだろうと考えて、彼は自らを慰めた。旅館の主人の自慢のシェリー酒を一本——非常に怪しげな混合酒だったが——一緒に楽しんだあと、伊達男は数年来の知り合いであるかのように話し始めた。とうとう食事の後片付けがなされ、コーヒーが運びこまれ、葉巻に火がつけられると、彼は満ち足りたように両足を安楽イスの肘かけにのせ、左手で頭を支え

て、どうやら何か大切なことを語るための心の準備をしているように見えた。

「で、おそろく」と彼は話した。「ぼくのことをとても奇妙な奴だと思ってるだろうが、君がアメリカのファーンズワース家の者たちと懇意だと言ったんで、ぼくはホントに君を特別な友人だと思ってるんだぜ。君を退屈させはしないよ。退屈するってのがどんなことか、ぼく以上によく知ってる奴はいないからな。初めからこんなに質問するのは無礼この上ないから、どうして好奇心を抱いてるのか、こっそり君に話す必要があるよね。かなり変てこりんな話なんだけど、君にとっても面白いかもしれない」

「ぜひとも聞かせてください」と画家は言ったが、これは渡りに船と心の中で思った。

「ところで」——ここで葉巻をふかり——「知つてのとおり」——ふかり——「ぼくには父がいた——つまり、今はいないという意味だ。二年以上も前に死んだのさ。で、父には弟と妹がいてね。弟のフィリップ・ファーンズワースは若い頃にアメリカに行ったんだけど、それ以後は彼の手紙も噂も家族の者たちにはほとんど届かなかった。妹の方はウォルステンホルムという男と結婚したが、しばらく前に夫は亡くなつてね。妻は娘とともに貧困生活にあえがずにおむ程度のものしか残してもらえなかった。今朝、ぼくと一緒にいるのを見かけただろ、あの二人さ」

フレデリック・ファーンズワースは見るからに自分の話も山場を迎えたと思つていたようだ。なぜなら、ここまで来ると話をやめ、相手にどんな効果を与えたか観察していたからだ。画家

は微笑を浮かべてうなずいた。

「ところで」と、ファーンズワスは盛んに葉巻をすばすば吸いながら話を続けた。「オヤジが変てこりんな男だったことは知ってるよね。ある考えが浮かぶと、頭にこびりついてしまつて、二度と離れなくなつちまうのさ。それで、金持ちになつて財を築こうつて考えちゃつてね。その考えがメチャクチャうまくはまつてしまつて、死んだ時には財産が五万ポンドにもなつてたんだよ」

ここで話が第二の山場を迎えた。

「もう一つ浮かんだ考えつてのはこうだった。オヤジは一人息子と——ぼくのことなんだけど——ぼくの従妹のエイダ・ウォルステンホルムを——今朝ほど君が見たカワイイ娘さ——結婚させようと、ひとりで決めたんだ。なぜそんなことに情熱を傾けたのかは分からんが、とにかく独断でそうしちゃつたんだよ。でもね、オヤジはエイダが十八にもならんうちに亡くなつちまつた。ところが、この物好きな道楽が絵に描いた餅にならんように手を打つてたんだよ。変てこりんな遺書を書いてたのさ。ぼくには二万五千ポンドを残してくれた——母がぼくの子供時代に亡くなったのは知ってるよね。あとの二万五千はエイダに残したんだけど、それは彼女がぼくの妻になる日に払われることになつてゐるんだ。お分りかな？　ぼくらの結婚を妨げるようなことが起こつたり、エイダが二二歳になるまでにぼくと結婚しなけりゃ、その金はフリリップ・ファーンズワスカ、または彼の相続人たち——アメリカにいる君の知り合いたち

——のものになっちまうのさ。そういった条件をちゃんと頭で理解するのに、ぼくはメチャクチャ苦労したけど、君には全部きちんと説明できたと思うよ。ぼくがどうしてファーンズワース家の人々について質問ばかりしたか、これで納得できただろ？」

しばらく沈黙となり、その間いくらか間が抜けたような顔でフレデリックは客人の画家にほほえみかけていたが、客人の方もまた頭をのけぞらして、相手の葉巻の端から立ち昇る煙の渦を見てほえんでいた。

「しかし、もちろん」と画家がとうとう口を開いた。「お金がぼくの友人フィリップのものになる恐れはないんでしょ？」

「うん、ないとも」とフレデリックは即答した。「ああ、ちくしうめ、あるもんか！でも、なあ、時間の問題なんだよ。実を言うと、エイダはかなり変てこりんな娘でね。自分じゃ決断がつかないみたいなんだ。一つには、あの娘と母親がこの片田舎に一年中ずっと住むと言つてきかないのさ。ぼくが見たかぎりじゃ、ここの生活が気に入ってるようだが、ちくしうめ、田園生活なんか遅かれ早かれ人間の心を衰弱させずにおかないよ。そう思わんかね？ そんなんじゃ、人間はぐずぐずして決断が鈍くなっちまう。少なくともそう思うがね。去年、ぼくはここに来て、いけ好かない『馬車馬旅館』で長い、長い一ヶ月を過ごしたんだぜ——俗な言い方をすりゃ、プロポーズするだけのためにね。それから今年もまた来ちゃって、二週間もずっと毎日のように彼女に会ってるんだけど、いつも完全な腰くだけで、結婚のけの字も匂わ

せることができるのだよ——いいかい、むしろくしゃしてエイダに八つ当たりする始末さ。ああ、ちくしょうめ、思いの丈を打ち明けられるように、彼女も少しぐらい勇気つけてくれたっていいと思うんだが——すべて彼女のためなんだから」

「彼女に思いの丈を打ち明けたような男は、他には絶対いないんですね？」と、画家は生き生きと目を輝かせながら尋ねた。

「チエツ！ 誰がそんなことができるもんかね？ とにかく、彼女に二万五千ポンドを失う価値があると思わせるようなことは、どんな男だってできやしないよ」

画家は眉毛を上げながら、できないだろうねと言わんばかりに首を横に振った。そして、また沈黙が訪れた。

夕闇が迫ってきたので、二人はベントンの旅館の方角に向かって一緒に歩いて行き、すぐまた会おうと約束してから別れた。

\* \* \* \*

次の日の朝、いつもの場所で画架に向かって精を出していると、青年画家は数人の声が聞こえたので振り返った。二人の御婦人がファーンズワスに付き添われ、また通り過ぎようとしている。いや、今回はそのまま通り過ぎることなく、伊達男に導かれて画家の方に近づいてき

た。それから、この種のことには慣れているようで、伊達男は礼儀正しい口調で画家を二人に紹介してくれた。

「甥っ子の話では」とウォルステンホルム夫人が言った。「アメリカにいる私どもの親類とは懇意な間柄だそうですね。奇遇ですわ、こんなに私どもの近くにいらっしやるなんて！」

画家は丁寧な言葉で応対したが、そのあと御婦人たちは彼の絵を観察していた。エドワード・ベントンは神経質な男には見えなかったが、まぎれもなく談笑中はそわそわしていた。エイダが話す時はいつも、彼の頬はそれと分かるほど赤らんでいた。エイダは実にチャーミングな茶髪の娘で、細身で背が低く、素朴な田舎の服をまとった姿はうっとりするほど美しい。ほとんど自分から話すことはないが、絵画について少し発言した際は、知性のみならず自然美と人工美に対する鋭い感受性もそこに見てとれた。

「お邪魔して申し訳ありませんわね、ベントンさん」とウォルステンホルム夫人が言ったのは、会話が十分ほど続いたあとだった。「この小道は古い思い出がぎっしり詰まってまして、私たちにとってそれはもういい、いいものです。ですから、油絵で見られるのであれば、その誘惑にはとても逆らえませんのよ」

「あー、そうですね」と、ファーンズワスがいつものように母音を引き延ばした口調<sup>(5)</sup>で言った。「ですが、もちろん、完成するのはまだまだ先のことですよ。また見に来ないといけませんね」

「いいですとも」と彼の叔母は言った。「ベントンさんがお許しくださればの話ですが・・・」三人が行ってしまうと、画家は立ったまま地面を見つめ、物思いにふけていた。時おり何かに腹を立てたかのように唇をかみしめていたかと思うと、次の瞬間にはエイダの声にまだ聞き入っているかのように、頬が次第にほんのり赤くなった。彼は自分の絵のことなど完全に忘れて長時間ずっと立っていたが、やがて太陽の光が弱まり、頭上のクリの葉っぱが力サカサと強い音を立て始めた。空を見上げると、夏の嵐が近づいていた。

「旅館に戻らなくては」と彼はつぶやいた。「じっくり考えてみないといけない。オレは馬鹿な真似をして物笑いになってたんじゃあるまいか？」

青年画家の心の悩みは、その原因が何であれ、さほど長くは続かなかった。ささやかな昼食をすませると、嵐も静まっていたので、彼はスケッチの道具と一緒にカバンを肩にかけ、また出かけて行った。この頃には、地表にまた暖かい太陽の光が降り注いでいたので、彼の顔にも陽気さが戻ったように見えた。彼は、現在の絵が完成したら即座に取りかかろうと思い、新しい絵の題材を探していた。前に何度か散歩した際に、いくつか絶景ポイントを見つけていたので、今日の午後はそれらを再訪して見比べるつもりだった。特に彼の関心を引いたのは古びた美しい一軒の農家だったが、そこはずいぶん前に空き家となつて人が住んでおらず、今ではすっかりツタとコケにおおわれている。一時間ゆっくり歩いて目的地に到着すると、その絶景ポイント<sup>(6)</sup>はすでに他人に取られていた。若い淑女がキャンプ・スツール<sup>(6)</sup>に腰かけて、水彩絵の

具でスケッチをしていたのだ。それがミス・ウォルステンホルムであることは、一度チラッと見ただけで分かった。

近づくべきか、それとも気づかれないうちに退散すべきか？ 彼は一歩進み出てから立ち止まった。さらに一歩進むと、それで彼の心の惑いは解かれてしまった。エイダが彼に気づいて腰を上げたからである。

「嬉しく思います、ウォルステンホルムさん」と彼は話しかけた。「ぼくたちの好みが一致したのですから。何日か前ぶらぶら歩いていると、たまたまここを通って、スケッチをするには間違いない最高の景色だと思ったのです」

「それじゃ、この古びた場所を高度な技術で絵にするおつもりなのですね」と彼女は言ったが、この予期せぬ出会いに対して少しそわそわしているような様子であった。

「私はアマチュアの絵描きにすぎませんが、ここが素晴らしい題材になることは分かりますわ」

「今まで見た中でも最高の部類ですよ。あなたはスケッチを始めたばかりのようですね」

「三十分ほど前からです。じっと見つめたりなさらないでね。絵画を勉強したことはありませんもの。完全に間違った自己流なんです」

青年画家が技術的なアドバイスを少ししたので、エイダは感謝の言葉を述べた。それから沈黙が訪れた。



「リンゼイ・エッジはもう御覧になりましたか？」と、エイダはせつせと絵の具を交ぜながら尋ねた。

「聞いたことさえないのですが・・・」

「まあ、ぜひ行かれるべきですわ。ほればれするような場所で、ミードム村からはほんの数マイルです。従兄<sup>いとこ</sup>のフレデリックに道案内してくれるように頼んでみましょうね」

数日の間にファーンズワスが同勢四人でリンゼイ・エッジに出かける手はずを整えてくれた結果、当日は非常に楽しい一日となった。その遠出から帰宅し、ウォルステンホルム夫人のティー用のテーブルに着くと、みんな和気あいあいとした実に愉快的な会話が盛り上がった。この家は二階建てのよくある田舎家で、とても小さな前庭に加えて、裏にはちょっとした家庭菜園がある。二人の御婦人には何とか暮らせるだけの収入しかないとファーンズワスが話しているのをベントンは聞いていたはずだが、その飾り気のない質素な生活ぶりは、どんなにほめてもほめ足りなかった。そうした美德からであろうか、エイダは幼い女中<sup>め</sup>に手を貸してティーの準備をしていたかと思えば、次の瞬間には公平で私心のない考えや非常に素晴らしい言葉で会話に加わっていた。

こうして友情が確かなものになると、ベントンはファーンズワスやその親類たちと頻繁に会うようになった。定期的に倦怠<sup>アンニヤ</sup>に陥るファーンズワスにとって、この画家は貴重な退屈しのぎの相手であり、スケッチに精を出すエイダにとっては形式ばらない、とても役立つ援助の手を

差し伸べてくれる人であつた。晴れた夏の夕刻に一緒に散歩する機会も増え、おそろく奇妙な偶然だったのだろうが、エイダがスケッチに出かける方角へ、画家もぶらぶらと歩いて行くことが一度か二度あつた。エイダは、好奇心あふれる聡明な娘らしく、アメリカの生活や景色について数多くの質問をした。そういった話題であれば、エドワード・ベントンも話すことはたくさんあつた。ここで明らかにしておかねばならないのは、この若者が以前ほど絵画に注意を払わなくなつたことだ。将来のために絵の勉強をすべき時なのに、ものうげな夢心地の状態で午後の時間を過ごしていたのである。しかし、その白日夢はいつも楽しいものであつた——それにまた、何か骨の折れる作業をしようにも、あまりにも暑すぎる天氣が続いていた。

\* \* \* \*

リンゼイ・エッジに出かけてから約三週間後のある日の夕方、フレデリックは今度という今度は「背水の陣で臨む」<sup>(8)</sup>つもりだ、遅かれ早かれ決着をつけねばならないのだ、のどかなミードムの農村なんかに住み続けるのはもう耐えられないと、友人の画家に対して言つた。要するに、次の日にエイダにプロポーズするということであつた。しかしながら、画家はちよつとした悪気のない冗談を飛ばしたあと急に深刻な顔になつた。

「真面目な話」と彼は言つた。「君の決意は立派だけど、成功を祈ると言えば、ぼくは偽善者

になつてしまふよ」

「はあ？ 一体全体どういう意味かね？」と、ファーンズワスは驚いて尋ねた。

「君の気分を害するかもしれないが、悪気はないんだよ。もう少し前に話すべきだったね。実を言うと——ぼく自身がウォルステンホルムさんに惚<sub>ほ</sub>れてしまったのさ」

フレデリックは呆<sub>あ</sub>氣にとられたような、滑稽な表情で相手を見つめた。「で——彼女にそう伝えたのかい？」と、すぐに彼はあえぐようにして尋ねた。

「とんでもない。推測させるようなことすらしてないよ」

ちよつと沈黙があつた。その間にファーンズワスの表情は驚きから哀れみへ徐々に變化した。

「ちくしうめ、ベントン！」と、彼はやつと口を開いて大声で言つた。「それは御愁傷さまだな。だって、もちろん君にはチャンスなんか全然ないんだから。こんちくしう！ だから、ずつとあんなに満足したようなふりをしてたんだな？」

「実際に満足してたさ、君。ぼくは全くもつて満足してるよ」

「そうか、そうか、もちろんそう努力してるんだろうね。それはそれで偉いと思うぜ。ちくしうめ！ ホントに同情するよ。だって、ぼく自身がひどい馬鹿だから、君の立場がどんなものか、よく分かるからね。ちくしうめ！」

画家はひとりこつそりと笑いながら立ち去つたが、ファーンズワスの方は本質的に氣弱な男

だったで、それから一時間ほどずっと意気消沈していた。しかし、翌朝になると、この伊達男は緊迫した情勢に対して気を引き締め、一言でいえば「背水の陣で臨む」準備ができていた。それで、彼はエイダと二人だけで話すことを正式に求めてから——そういう方法でしか事を始められないとは哀れな男だが——前もって練習していたスピーチを彼女に披露した。いやでたまらない『馬車馬旅館』で二年も続けて夏を過ごしたのはすべて彼女のためであることを伝え、そうした犠牲に対しては真心と結婚の承諾で報いてほしいと願ったのである。このスピーチで彼はすでに頭が混乱していた。だが、エイダが穏やかな口調で感謝しながらも、妻になることはできないとはつきり言うのを聞くと、彼は数分間ずっと何も言えず、彼女の顔を見つめることしかできない精神状態に陥っていた。

「でも——でも——なんてこった、エイダ——と、彼はやつと口ごもりながら言った。「ホントに本気なの？　ぼくが——ぼくがこんなことを言うのは不作法かもしれんが——父の遺書の内容がどんなものだったか、忘れたわけじゃないよね？」

「よく憶えてるわよ、フレッド」と彼女は笑みを浮かべながら答えた。

「それじゃ——それじゃ、まさか本気で——二万五千ポンドをふいにするつもりじゃないだろうね？」

「ふいになつても悲しくないわ。そんなにお金をたくさんいただいても、どうしたらいいか全く分からないもの」

「どうしたらいいか全く分からないって？　でも、一生涯こんな——こんなミードムみたいな寒村で暮らそうなんて本気で考えてはないよね？　ロンドンに家を持ちたい——自分専用の

馬車とか、オペラ劇場の特別席ボックスとか、家庭招待会(9)とか、それから——それから他にもいろいろ持ちたいとか、したいとか思わないの？　ぼくのように馬鹿な男は好きじゃないにせよ、エイダ、そういったものに全く心を惹かれないのかい？」

「だからといって、フレッド、愛してもないのに結婚するような、そんな悪いことをあなたにする気になれないの。従妹としてなら、いつも心から愛情を捧げられるけど・・・でも、あなたの妻にはなれないわ」

「でもさあ、エイダ」と、哀れな男はせきたてるように言った。「よく考えておくれよ。ちくしうめ！　二人が一緒になれば、五万ポンドを全部もらえるんだよ。立派な名士にだってなれるんだぜ。さあ、よく考えてみるって言ってくれ」

いくら言っても駄目だったので、数時間後にはファーンズワースもすでに旅行用の大型カバンの荷造りを終え、もよりの駅まで運ぶように命令を下し、事の顛末てんまつを画家に報告していた。

「いやはや！」と彼は大声で言った。「女という生き物は理解できんよ、まったく。ちくしうめ！　でも、彼女が二万五千ポンドをどぶに捨ててるなんて、誰が一体そんなこと考えるかね？　いやはや、ベントン！　今度は君ががんばってきた。ぼくにはそれしか言えないね」

それから一週間もしないうちに、青年画家はエイダと彼女の母親のもとへ別れの挨拶に行っ

た。商用でロンドンに呼ばれたのだが、今の予定では十月初旬にミードム村にまた戻り、秋の紅葉を少し勉強するつもりだと、彼は二人に伝えた。彼女たちも予定どおり行きますようにと言ってくれたので、彼は素晴らしい友だちとして二人と別れることができた。

それから二週間後、大きな小包が田舎家に配達された。中にはウォルステンホルム夫人が大好きだと言っていた例の小道を描いた油絵が入っていた。立派な額縁入りで、居間にかけてさえすればよい状態になっていた。一緒に届いた短い手紙には、赤の他人を親切にもてなしてくださった二人への感謝のしるしとして受け取ってほしいと書かれていた。その手紙には住所が記されていていなかったものの、「エドワード・ベントン」という署名があった。

\* \* \* \*

十月初旬のある朝のこと、田舎家の扉をコンコンとたたく際立った音が聞こえた。それに応じたエイダは、自分がエドワード・ベントンと向かい合っているのに気づき、火が出るほど熱く頬をほてらせた。ウォルステンホルム夫人は御在宅ですかと尋ねられると、エイダは目に涙をいっぱい浮かべ、返事に窮してしまった。彼女はとても低い声で口ごもりながら、「母は外出中ですが、間もなく戻って参ります」といった旨の言葉<sup>ひび</sup>を発し、数分ほど待っていただけませんかとベントン氏に言った。青年画家はまだ記憶に新しい小さな客間に入ると、部屋の中で

一番よく見える場所にかけてある自分の絵に目を留めた。

「こんな素晴らしいプレゼントをしていただき、感謝の言葉ありません」と、エイダは彼の視線の先を一緒に見ながら、隠微な陰りのある声で言った。「これほど母に喜びを与えることのできる絵はないでしょう」

「きれいな古びた小道ですからね」と、彼は相手の顔をじっと見つめながら答えた。「ぼくにとつてはずっと記憶に残るでしょう。だって、ウォルステンホルムさん、あなたに初めてお会いした場所ですから」

彼女の頬の赤らみが消え、急に青ざめてしまった。沈黙が訪れたが、その間ずっと二人は目を輝かせて互いの顔を見つめていた。それから、ささやき声で質問がなされ、その答えもささやき声でなされた。そして、また沈黙が支配した——すすり泣きをこらえる声を除いて。

十五分ほどして戻ってきたウォルステンホルム夫人は、エイダが苦悩の表情を顔に浮かべて客間にひとりで座っているのに気づいた。どうしたのかと尋ねると、エイダは涙を流してから笑い、そして母親の首に飛びついた。

「お母さま」と彼女はささやくように言った。「お留守の間に、ベントン氏がここにいらしたの——そして、妻になってほしいとおっしゃったのよ」

「それで——それで——あなたの返事は？」と、母親はやや深刻な面持ちで尋ねた。

「私がしたことは間違っていないと思うの」と、娘はすすり泣きながら言った。「実のところ、

イエスと言わなかったんだけど——どうしてあんなことになってしまったのか思い出せないわ——どうして——」

彼女は最後まですべて告白することができなかった。

「ねえ、エイダ」と、ウォルステンホルム夫人はちよつと考えてから言った。「私はあなたの幸せを何よりも望んでるのよ。でもね——ベントン氏は私たちにとっては赤の他人も同然よ。あの方が紳士だという理由は確かにいろいろあるんだけど、遠回しに一度か二度おつしやったように、お金持ちなんかじゃないのよ」

「でも、とっても聡明な画家でいらつしやるわ、お母さま。きつと有名になれるでしょうし——それまで私たち、待つことができてよ」

「あなたがあの方のために何を犠牲にしようとしているか知つてらつしやるのなら、エイダ、ベントン氏はずいぶんと自尊心が強い人だわね」

「まあ、お願いだから、そんなことは言わないで。お金が自分のものになるなんて、夢にも思つたことないんですから。望んだことさえないのよ」

ウォルステンホルム夫人はかすかに溜息をついた。彼女が母親として娘と同じように野心や期待を抱いていなかったかどうかについては、誰にも分からない。

「あなたって賢くて、いい娘ね、エイダ。あなたの心が正しく導いてくれると思わずにいられないわ。ベントン氏と内密に会わないといけないわね。すぐにまた、多分、こちらにいらつ



しやるでしょうけど・・・」

その日の夕方うちにウォルステンホルム夫人に宛てた短い手紙が届いて、次のようなことが書いてあった――

親愛なる叔母さまへ

ぼくは礼儀をわきまえない嘘つきとして叔母さまの前に参上いたしますが、自分の愚かな行ないを本当に後悔しており、お赦し願いたいと心の底から思っています。「エドワード・ベントン」というのは実在しない名前です。ぼくがこの村に來たのは、そもそも、父がミードダムは自分の生まれた村で、幼年期を過ごした村だと言っているのを聞いていたからなのです。もちろん、ウォルステンホルムという名の親類の人たちがいるのは知っていましたが、どこに住んでいるのかについては全く分かっていませんでした。父が亡くなってから、ぼくは流離<sup>さすらい</sup>の絵描きとなって、限られた財産での生活に不満も抱かずに、いつの日か有名になることを夢見ていました。というわけで、フレデリック・ファーンズワースと知り合いになり、彼を通してあなた方と親しくなれたのは、本当に単なる偶然だったのです。では、なぜ、ぼくは本名を隠したのでしょうか？　ぼくがアメリカ生まれだと言うと、すぐにファーンズワースはニューヨークにい

る彼と同じ名前の親類たちを知っているかと尋ねてきたので、ぼくはギョツとしてしまい、とつさにその場で自分の身元を隠してしまいました。彼がぼくのことをあなた方に話したと知り、実際にベントン氏として紹介してくれたので、一方ではその場で正直に告白する勇気が出ず、一方では気まぐれな性格が災いして、あなた方に対して不当にも愚かなことをしてしまったのです。理由がもう一つあるとすれば、多分、それは美しい従妹に一目惚れしてどうしようもなくなったことでしょう。ある愚かな虚栄心から、ぼくは特別な権利や資格が全くない赤の他人として——今の取り柄だけで判断してもらうしかない男として、一か八か運だめしをしてやろうと思いました。ぼくの話はこれだけです——いや、全部というわけではありません。でも、きつと残りの部分はエイダからもうお聞きになられたでしょうね。ぼくは不在中にロンドンで業務があり、その執行に携わっていました。明日の朝、表敬訪問させていただきますが、逆鱗に触れていないようでしたら、その際にたくさんのお話しさせてください。

悔い改めたフィリップ・ファーンズワースより

「しかし、これはまあ！」とウォルステンホルム夫人は叫ぶように言った。「あなた、すべて知ってたの、エイダ？」

「とんでもありません、お母さま」と娘は答えたが、その顔は嘘でないことを雄弁に語っていた。

「フィリップ・ファーンズワースですって！　そして、あの方の父上は亡くなっているのね！　それじゃ——それじゃ、あの方が二万五千ポンドを相続するってことになるわけ？」

「私が従兄のフレッドと結婚するのを拒んだ場合にだけね、お母さま」と、いらすらっぽくエイダが答えた。

「これは、これは！　あの方は遺書のことを知っておられるのかしら？　どうしてまた来られるのを明日まで待たなきゃならないの？　待ち遠しくてイライラするわ！」

そこで、エイダは「イライラするのは罪よ」という小言を母親に述べ、それから床に就いたが、まんじりともしないで夜を明かしてしまった。

【訳注】

- (1) 北半球に分布するモクセイ科トネリコ属の双子葉の樹木で、英語名はアッシュ (ash)。木材として頻繁に利用される
- (2) 本を開いて伏せたような山の形をした屋根の両端の三角形になった壁面 (gable)。破風<sup>はふ</sup>ともいう。
- (3) 木製の玉・円盤を転がして九本のピンを倒す遊戯で、九柱戯 (ninepins) ともいう
- (4) 西洋夏雪草<sup>セイヨウナツユキソウ</sup> (meadow-sweet) は草原に群生するモンゴル原産のバラ科シモツケソウ属の多年草。花や葉や根から甘い香りを発する。花言葉は「魅了、清楚な美しさ」。吸い葛<sup>スイカズラ</sup> (honeysuckle) はスイカズラ科スイカズラ属の常緑つる性の植物。日本名は花の付け根の部分にたまっている蜜を吸うことから。花言葉は「愛の絆、寛大で献身的な愛」。
- (5) 母音を長く引き延ばした、だるい話し方はオックスフォードなまり (Oxford drawl)。
- (6) X 形の脚に帆布を張った折りたたみ式の簡易腰掛。
- (7) 召使の数は当時の中産階級のステータス・シンボルの一つだったので、中産階級の最下層でも食事だけを与えて通わせる女中などがいた。
- (8) 元来はボクシング用語 (come up to the scratch) で「試合開始線まで出てくる」という意味。口語的な意味は「準備 (覚悟、決意) をする」。
- (9) 招待者が在宅の日時を伝え、客はその時間内の適当な時に現れる略式のパーティー (athome)。